

政子の同期となる生徒には、後に明治期の洋画の代表的作家となる浅井忠、小山正太郎、松岡寿、山本芳翠、五姓田義松らがいた。また、女生徒には政子のほか山下りん、神中系子、川路はな子ら六人の生徒がいた。その後りんは、政子に誘われ正教会に入信する。

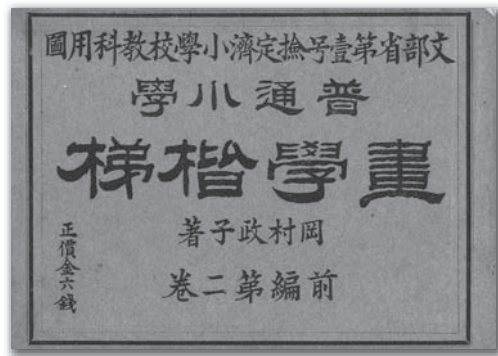
フォンタネーシの契約期間は三年であったが、健康上の理由と、西南戦争後の財政難により、希望していた新たな校舎建築の実現が難しくなったこともあり、一八七八（明治11）年九月に辞職し、帰国してしまう。しかし後任の教師が能力も品性もない人物であったため、生徒たち十数人が抗議し退校する事態（連袂退校事件）へと発展する。この中に政子も含まれていた。

●石版印刷会社信陽堂

美術学校を退校した政子は、一八八〇（明治13）年九月一六日、慶應義塾の福沢諭吉のもとで学んだ岡村竹四郎と結婚入籍し、この年長女を出産する。ニコライは政子をイコン修行のためロシアに留学させようとしていたが、政子が結婚してしまったため、代わりに急遽りんが派遣されることになった。ロシアに向け、りんを乗せた船が横浜を出港した二年後の一八八二（明治15）年、竹四郎と政子は東京府京橋区加賀町一番地（現東京都中央区銀座）に信陽堂石版印刷所を創業した。

政子は竹四郎を助け、作画と製版を行った。二人の

努力に加え、ニコライや福沢諭吉らの援助にも支えられた信陽堂は、福沢の創刊した日刊紙『時事新報』付録や、歴史画・風俗画・肖像画など、多くの多色刷り石版画を発行し、業績を伸ばしていった。



政子が著した教科書『普通小学画学楷梯』

一八八五（明治18）年には文部省第一号検定済み教科書『普通小学画学階梯』、その三年後には『新撰画学入門』を出版し、

政子が手本となる絵を描いている。また、一八九一（明治24）年には、

明治天皇・皇后の肖像を献上し、これを印刷して頒布する許可を得て、成功を収めた。

信陽堂は業務拡張に伴い、一九〇六（明治39）年同業三社と合併して東洋印刷株式会社となり、竹四郎は専務取締役就任するが、政子はこの頃には経営を助け絵筆をとらなくなっていた。

東洋印刷は順調に発展していったが、一九二三（大正12）年九月一日の関東大震災によって大損害を受け、数年後に解散することになってしまう。また、この災害により東京芝の自宅に所蔵されていた政子の肉筆を

含む作品や、資料のほとんどを焼失してしまった。



岡村政子画 時事新報五千号付録
1897（明治30）年 多色石版
佐久市立近代美術館蔵

残された作品は少ないが、明治初期の混乱した時代に単身上京して西洋美術を学び、日本の初期石版画史上に大きな役割を果たした政子は一九三六（昭和11）年二月三〇日、竹四郎はその三年後に死去した。共に七八歳であった。

（小山雅比古）

参考文献

- 山室次郎『岡村政子伝 明治石版画界の異彩』 尚美印刷工芸社
- 青木茂編『近代の美術46 フォンタネーシと工部美術学校』 至文堂
- 大下智一『山下りん―明治を生きたいイコン画家』 北海道新聞社
- 中村健之介編訳『ニコライの日記』上・中・下 岩波書店

佐久の先人たち²⁴

明治の先端を生きた石版画家

おかむらまさこ

岡村政子

(1858~1936年)



明治初期に佐久から上京した政子は、正教会の女学校に寄宿しながら、日本初の公立美術学校であった工部美術学校の一期生として洋画を学んだ。その後、夫の岡村竹四郎とともに石版印刷会社信陽堂を起し、数々の石版画を世に送り出した。

●政子の生まれた時代

岡村(旧姓山室)政子は、明治維新の一〇年前となる一八五八(安政五)年一月一日、父・岩村田藩士山室直高と母・さだの娘として江戸に生まれた。文学者の山室静は政子の甥にあたる。

政子誕生の前年には、ともに美術学校で洋画を学んだ後、ロシアに留学してアイコン(聖像)画家となる山下りんが常陸国笠間(現茨城県笠間市)で、三年後には政子の生涯の伴侶となる岡村竹四郎が、佐久郡高瀬村(現佐久市高瀬)でそれぞれ生まれている。

時代は、日本が長く続いた鎖国を解き、西欧の文物を取り入れて近代国家になろうとする激動期に入ろうとしていた。

●上京して工部美術学校へ

時代が江戸から明治に移った頃、政子は家族とともに父の郷里岩村田へと引き上げたことから、少女期を佐久で過ごすこととなる。

一六歳となった政子は、新たな生活を切り開いて行く決心を固め、姉の嫁ぎ先を頼りに上京する。東京へ向かう鉄道もまだ無い時代に、女性ひとりで上京するのは、よほど強い動機付けと勇気が必要なことだったと思われる。

かつて岩村田藩邸のあった神田明神下からほど近い神田駿河台に、ロシア正教会の宣教師ニコライが宣教本部を設置したのは一八七二(明治5)年のことであった。その後、正教女子学校、正教神学校が設立されたが、政子は上京後間もなくしてこの寄宿制女子学校に入学し、やがて洗礼を受ける。

ニコライは日本宣教団設立準備のため一時帰国した際、ロシアから石版印刷機を携えて戻り、自ら布教に必要な文書類を印刷していた。ニコライは石版印刷の手ほどきをした政子に画才を認め、一八七六(明治9)年に開校した工部省工学寮美術学校(工部美術学校)に第一期生として入学させた。

ニコライは、政子が日本各地に設立される教会のアイコンを描く画家になることを期待していたようである。政子は月謝二円の学費と食費は負担してもらっていたが小遣い銭はなかったため、片方ずつ拾った下駄に緒をすげ替え、学校に通ったと言われている。

工部省は明治初期の殖産興業政策を推進した政府の中枢機関で、近代技術を移植するため欧米各国から多数の技術者(お雇い外国人)を招いて人材の養成に当たらせていた。美術学校でも画家のフォンタネージ、彫刻家のラグーザ、建築家のカペレットティガイタリアから招かれた。これら教師による西洋美術の組織的指導は、日本で初めてのものであった。



フォンタネージ送別会記念写真 1878(明治11)年
後列左から2人目が政子、その右がフォンタネージ
『岡村政子伝』所収